

## 第 20 回(2014.01.10 配信)

### 篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

#### 将軍と征夷大將軍

鎌倉幕府や徳川幕府の「将軍」と、有名な坂上田村麻呂などの「征夷(せいい)大將軍」はどう違うのか、あるいは征夷大將軍の称号は源氏だけに与えられるものだとか、いろいろな説もあって混乱しますが、幕府の将軍とは征夷大將軍の略です。また、征夷大將軍の称号は源氏だけに与えられたものではありません。

征夷大將軍とは、本来東北の反乱軍を平定するのが役割でした。坂上田村麻呂(さかのうえのたむらまろ:758～811)が有名ですから、最初の征夷大將軍だと思われがちですが、延暦 13 年(794)に大伴弟麻呂(おおとものおとまろ)が任命されたのが最初で、坂上田村麻呂は延暦 16 年(797)に任命されていますから 2 代目です。

もともと征夷大將軍は、蝦夷(えみし:現在の関東、東北)の朝廷の力が浸透していなかった地方に遠征する部隊の長です。中国、四国、九州などに派遣される部隊の長は「征西(せいせい)大將軍」と呼ばれました。「純友の乱」で瀬戸内海に派遣された藤原忠文などが征西大將軍として有名です。しかし、鎌倉以降は征夷大將軍の称号だけが使われるようになりました。

この征夷大將軍の称号は代々源氏に与えられる称号だという人がいます。天下を取った織田信長は平氏の出だから、また豊臣秀吉は百姓の出だから征夷大將軍の称号を与えて貰えなかったという話もあります。源氏では、頼朝や義経の従弟にあたる木曾義仲(源義仲)が寿永 3 年(1184)に任命され、「旭将軍」と呼ばれました。その後は頼朝、頼家、実朝と続きますが、それ以降藤原頼経や藤原頼嗣という撰家が将軍に任命されていますし、撰家の次は親王が将軍に任命されています。このように、征夷大將軍は源氏の専売特許・登録商標ではないのですが、武家の棟梁と称された八幡太郎源義家の系統が征夷大將軍にふさわしいという風潮が当時はたしかにあったと思われま

そこで、それまでは藤原姓を名乗っていた徳川家康は、関東に下る際に源姓を名乗るようになりましたが、それも「征夷大將軍」の称号を得るためだったという説がありますし、また、建武 2 年(1335)足利尊氏は北条時行の追討を命じられた際に「征夷大將軍は代々源平の者が任官しているから、自分もその称号が欲しい」と要求したという逸話もあります。それらのことを考え合わせるとき、徳川家康が藤原から源に姓を改めたことや、九州の島津家の祖である島津忠久や、大友家の祖である大友能直が頼朝の隠し子だったという伝説を作り出したのは、清和源氏がブランドであり憧れの的だったからに違いありませんが、家名を売りものにする当時としては笑いごとではなかったのでしょうか。そういえば、「平成の誠意大將軍」で一世を風靡したタレントがいましたが、これには笑いました。

#### 譜代と外様

徳川将軍家や大名などの「譜代」とか「外様」という言葉はよく知られています。譜代とは何代にも亘って主家に仕えた家臣をいいますが、「外様」という言葉は徳川時代になってから使われ出したことはあまり知らないようです。戦国時代以前までは多くの武士たちは主従関係において縛られることが少なく、金銭や領土など恩賞の多寡によって味方しましたから、あくまでも「郎党(家来)」と「味方」の区別であって、譜代とか外様とかというような区別はしなかったようです。

徳川幕府においては、関ヶ原の合戦以前から家康に従っていた大名を「譜代大名」と呼びま

したが、時代が下っていくにつれて例外ができ、また譜代大名も若干増えました。なお、大名の中でも家康の男系子孫は「親藩」と呼びました。

江戸時代における譜代大名とは、関ヶ原以前から徳川家康に臣従していた大名とはいえ、ほとんどが10万石から30万石程度の小大名でしたが、地方の要衝に配置されて外様大名の監視役を担っていました。また、老中(ろうじゅう)など幕閣の重要な役職につくことができましたが、例外があって、老中になった田沼意次(たぬまおきつぐ)などは一介の小姓上がりだったし、高崎藩主となった間部詮房(まなべあきふさ)は猿楽師(能、狂言の前身)でしたが、大名となり譜代大名扱いされました。

また、堀田正盛は江戸初期の老中でしたが、堀田家は関ヶ原の合戦以降に徳川家康に臣従した武将であり、堀田家とは縁戚関係にあった淀藩稲葉家の先祖は、譜代大名として老中を出す家柄でしたが、関ヶ原の合戦で西軍に付き、途中で寝返った功績で出世しました。稲葉正成の妻が三代将軍家光の乳母で、春日局(かすがのつぼね)と呼ばれた婦人だったから、その縁で出世したと見られています。どちらも外様大名の陪臣(将軍の家来の家来)でありながら、旗本(将軍直属の家来)に取り立てられて大名となった例です。

江戸後期になると、信州の真田家のように外様大名でも老中になった例はあり、御三家(尾張、紀伊、水戸)、御三卿(田安、一橋、清水)、御家門(越前藩、会津藩、越智松平家)などの親藩と養子縁組をすると親藩待遇となることがありました。ただし、親藩は老中にはなれませんでした。

寛政の改革で有名な松平定信(1579~1829)は8代将軍徳川吉宗の孫ですが、白河藩松平家に養子に入りました。松平家は家康の異父弟が始祖ですが、親藩ではなく譜代大名だったので老中になれました。このように、江戸幕府は譜代大名によって政治が行われてきたのです。

第11代将軍家斉(いえなり)は、生涯に55人の子供をつくり大名たちに縁組みをさせましたから、親藩待遇の大名が増えたことはたしかです。だから55人の子持ちである家斉が歴史上最高の精力絶倫男といわれています。しかし、第52代の嵯峨天皇(786~842)は50人の子供をつくって源(みなもと)の姓を与えて臣下に落としました。いわゆる嵯峨源氏と呼ばれる源氏の流れのひとつです。そのまま皇族にさせていたら朝廷は破産するから、現代でいうリストラをしたわけです。記録に精力絶倫男といわれている徳川家斉は69歳で亡くなったのですが、嵯峨天皇は57年の生涯だから、単純計算すると嵯峨天皇の方が絶倫男なのです。

ちなみに、徳川家では将軍の娘が嫁ぎますと新しく朱塗りの門を造りしきたりがありました。現在残っているのは東京本郷にある東京大学の赤門だけですが、ここは加賀百万石で有名な前田家の江戸屋敷だったからで、こういった赤門は明治の大震災まではたくさんありました。一見、赤門は現在では非常に目立っていますが、江戸時代の各大名の江戸藩邸の門は、日光東照宮のような非常にきらびやかだったという説がありますから、当時は周囲になじんだ色だったのかもしれない。

余談ですが、私が生まれ育った家の門は通称「徳利門」と呼ばれていました。門扉に徳利(とっくり:現在では酒の席で出される燗をした酒が入った容器ですが、つい最近まではしょう油や酒、油などを入れた、もっと大きな容器でした。今ではペットボトルがその役をとってかわりました)をぶら下げていたからですが、人がやっと通れるほどの小さな門で老朽化が進み傾いていましたから、出たり入ったりの際には徳利の重さで門扉が閉まる便利なものでした。いわば半自動扉なのです。江戸時代でも貧乏な下級武士の家に多く見られたといいますが、なかなか風情がありますね。

(篠井純四郎)